

The Japanese Association for Metastasis Research

NEWSLETTER Vol. 39

- 第21回 学術集会日程のご案内
会告 新評議員の申請案内
寄稿 谷口 俊一郎 副会長
(信州大学大学院医科学研究科)
藤田 直也 新理事
(財) 癌研究会癌化学療法センター)
- 第22回 学術集会のご案内
第17回 研究奨励賞募集案内
会則 / 役員選任規程 / 役員名簿 / 変更届



JAMR

日本がん転移学会

URL : <http://jamr.umin.ac.jp>

第21回日本がん転移学会学術集会(総会)の案内

会 期：平成24年(2012年)7月12日(木)、13日(金)

会 場：オリエンタルホテル広島

(〒730-0026 広島市中区田中町6-10 TEL 082-240-7111)

テーマ：英知の結集－理解から制圧へ

特別講演 Isaiah J. Fidler (デキサス大学MD アンダーソンがんセンター)

「The biology and therapy of brain metastasis (仮)」

レクチャー 宮園浩平 (東京大学)

「TGF- β シグナルによるがん転移の制御」

落谷孝広 (国立がん研究センター)

「Exosome によるがん転移メカニズムの解明」

International Session

ワークショップ

ポスター発表

◆会議予定◆

理 事 会 7月11日(水) 17:00～18:00

評議員会 7月12日(木) 12:00～13:00

総 会 7月12日(木) 13:00～13:30

総会事務局

第21回日本がん転移学会学術集会・総会 会長 安井 弥

広島大学大学院医歯薬学総合研究科 分子病理学研究室

〒734-8551 広島市南区霞1-2-3

TEL: 082-257-5145 FAX: 082-257-5149

【事務局】大上 直秀 E-mail: naoue@hiroshima-u.ac.jp

運営準備室: 日本コンベンションサービス(株) 関西支社

E-mail: jamr2011@convention.co.jp

ホームページ <http://www2.convention.co.jp/jamr2012/>

新評議員の申請案内

日本がん転移学会会則第15条(P9)および本会役員選任規定第11条(P10)に基づき、次期評議員（任期：第22回～24回）補充選出を次の理事会にて行います。希望される方は下記の方法で申請して下さい。なお、自薦・他薦を問いません。

記

締 切：平成24(2012)年5月25日（必着）

■申請方法■

1) 所定の様式により指定期日までに申請して下さい。

申請書は、日本がん転移学会事務局へE-mailにてご請求下さい。

2) 申請書類は下記宛に簡易書留郵便で送付下さい。

〒537-8511 大阪市東成区中道1-3-3

大阪府立成人病センター内

日本がん転移学会事務局

Tel 06-6971-7951

E-mail office-jamr@umin.ac.jp

【注意事項】(日本がん転移学会役員選任規定より抜粋)

個人評議員の選出条件

1) 原則として3年以上本会会員であり、会費を完納していること。

2) 本会や関連学会、学術雑誌などですぐれた評価を受けていること。

※3年連続して評議員会を欠席した者はその資格を喪失する。

※役員任期は65歳になる年の12月末で終了する。

第21回日本がん転移学会

会長 安井 弥

寄稿 1 : 転移研究雑感

谷口 俊一郎 副会長 (信州大学大学院医科学研究科分子腫瘍学分野)

今年 2012 年は 9 月に MRS の国際がん転移学会がオーストラリアのブレスベンにて Erik W. Thompson 博士を会長として開催されます。これに際し、日本がん転移学会は若い研究者主体のセッションの設定を提案し、それが実現することとなりました。日本がん転移学会の奨励賞を受賞なさった方々は、そのセッションでの発表をすることになっています。本年 7 月には安井会長による広島での日本がん転移学会が開催されます。両学会に皆様奮ってご参加下さい。特に、若い方々がご自己研鑽の場として頂きたいと思えます。

今日、がん転移研究に限らず、ライフサイエンスの先端的研究が大変な勢いで進展するのは歓迎すべきかつ喜ばしいことで、自分達もその中で多少なりとも貢献したい、と願っています。一方、ビッグサイエンス化が著しく、激しい競争と評価の中で、研究費助成策が資本主義化し大きな大学・研究所と地方大学の格差が年を経るごとに加速されている現状があります。このような状況下、地方大学は、中央の動向と情報を注視し時代の流れに乗り遅れまいと心を砕くのではなく、地方大学が持つべき独自のミッション、そして研究や学問の楽しさと喜びを次世代に継承するという内面的豊かさを見失わず、また状況に一喜一憂せずになりたいものです。

生産性の高い所に研究費を重点配分する方法は、日本全体の平均値を上げる施策として妥当と思いますが、地方大学は予算と教員の削減にあえぎ、そしてポスドク、大学院生の獲得に苦勞が増しています。ただ、こんな状況下であっても、あるいはこのような状況であるからこそ、地方大学で働く研究者として、何ができるか、地方大学の役割は何であるのか、と考えたいと思えます。比較的ゆったりした時間の流れと豊かな自然は次世代への大切なシーズを育むのに良き環境です。大きな大学・研究所が先端的国际競争に多忙な大手デパート的役割があるとすれば、地方では良き意味での田舎の新鮮な香りがする品をじっくり育てる特産品販売の役割を担いたい、担うべきと思えます。江戸時代にお百姓さんが、幕府政策「生かさぬよう殺さぬよう」によって、貧困で苦しい生活を強いられておりました。ただ、「殺さぬよう」というのは、やはり食料を生産してくれるお百姓さんの大切さを認識していたからでしょう。それと類似性を論じるのは、不謹慎かもしれませんが、今日地方大学の研究を大切にする施策、研究を維持継続する最小限の手当て、の必要性を感じます。行き過ぎの合理化は平均値アップには効果的であっても、地方の大切なシーズを失い易く、大きな損失になるからです。地方大学には数が多くはないかもしれませんが、地味ながら大切なシーズがありかつ生まれ育つ土壌がありますので、日本の活性化と将来のために大切にしなければならないと確信します。地方の中小企業が宇宙開発の要となる部品を提供しているように、私の同僚もその数は少ないかもしれませんが、インパクトと質が高い成果を挙げています。私達のチームも、地方のゆったりした環境だからこそじっくり系を立ち上げ細胞死・炎症制御に重要な分子 ASC を見出し、自然免疫とがんとのかかわりを勉強する機会が与えられました

し、非常識な発想と非難を受けながらも大学発ベンチャーの立ち上げと臨床研究に至る開発研究ができたと思います。

がん転移と対峙する医者や研究者は、がん細胞の不安定性による不均一集団であることが治療を困難にしていることを理解すると思いますが、このことは逆に不均一とマイナーなポピュレーションの存在がその集団全体の逞しさをもたらすことを知っていると言えます。日本各地の多様で目立たぬポピュレーションとして存在するシーズそしてそれを育む土壌を大切に作る姿勢の重要性を、転移を学びその研究に携わる者として主張したいのです。

松本における2014年の本学会総会では地道にがん転移の本質であるがん細胞の不均一性の理解とその克服について、基礎的に、臨床的にそして歴史的に検証しつつ、道を模索したいと思います。ご理解とご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

第22回日本がん転移学会学術集会・総会の案内

会 期 : 平成25年(2013年)7月11日(木)、12日(金)

会 場 : ホテルブエナビスタ(松本駅前)

会 長 : 谷口 俊一郎(信州大学大学院医科学研究科)

MRS2012について

今年9月2-5日に第14回MRS 2012がBrisbane(Australia)で開催されます。

<http://metastasis2012.org/> 会長:Rik Thompson

現在の所、日本からは、武藤誠教授(京都大学)がplenary speakerに、井上正宏部長(大阪府立成人病センター)がinvited speakerに選出されております。

また、今年度JAMR奨励賞受賞者(早川芳弘Dr, 東京大学、福島剛Dr, 宮崎大学)が、Young Investigator Sessionで発表の予定です。

既に、演題登録が上記siteよりopenになっておりますので、皆さん奮ってご参加下さい。(ICP:International Program Committee:谷口俊一郎&伊藤和幸)

また安井会長のご厚意で、JAMR2012にMRSより下記2名の若手speakers Conor Lynch, Tampa, Florida, USA: conor.lynch@moffitt.org Belinda Parker, Melbourne, Australia: belinda.parker@petermac.orgが、JAMR2012のinternational sessionで発表されると共に、Rikと奥さんのElizabethも広島に来られJAMR2012に参加されます。

寄稿2 :がん転移阻害剤の開発を目指して

藤田 直也 ((財) 癌研究会 癌化学療法センター)

最近、がん転移をキーワードに含んだ論文の数が特に増えていることに気づかされます。特に、いわゆる一流誌にもがん転移関連の論文が数多く掲載されるようになってきており、がん転移研究の様相もだいぶ変わったなと実感しています。各年ごとに出版された「Metastasis」をキーワードに含んだ論文数は、PubMedですと、11年前の2001年では出版された論文数は6,000報ほどですが、昨年の2011年には13,000報余りと2倍以上に増えていました。もちろん一流誌の姉妹誌の発刊ラッシュが最近続いており出版される論文数自体が、その影響で増えていることも少しは影響していると思います。しかし、「Metastasis」をキーワードに含んだ論文数は毎年着実に増加していることから、がん転移を指向した研究自体が世界的に増加しているのではないかと推察しています。最近はがん転移をやりたいと言って私の研究室に入ってくる大学院生も増えてきており、本学会の果たすべき役割は大きくなりつつあると思っています。

私自身ががん転移研究を指向した経緯を振り返ってみますと、何となくがん転移は面白い分野だからやってみようと思って、東京大学応用微生物研究所(現在の分子細胞生物学研究所)の故 鶴尾隆教授の門を叩いたことに行き着きます。私が研究を始めた20年以上前は、がん転移の分子機構は殆ど未解明であり、がん転移の研究は全てが新鮮に感じられたものでした。しかし、いざその研究成果に関する論文を投稿しても、複合的な生体反応であるためにクリアな結果になっていないことなどを理由になかなかacceptされず、苦勞した割には報われない研究分野だなどがん転移研究への熱意が次第に薄らいでいったことを憶えております。鶴尾教授の元で助手・助教授を務めるようになってからは、シグナル伝達研究に重点を移し、本学会へも足が遠のいていた時期がありました。しかし、その中でがん転移と血小板凝集の相関に関する研究は細々と続け、2003年に新たながん転移促進分子として血小板凝集誘導因子Aggrusを同定することができました。すると、がん転移阻害剤を開発したいという当時の思いがよみがえり、現在の職場に移った6年前からはこれまでの研究スタイルを大幅に変え、Aggrusを標的にした治療抗体・低分子阻害剤の開発研究を中心に研究を進めています。

がん転移を標的として臨床応用されている治療薬は、臨床試験の難しさなどから現在でも殆ど無いのが現状です。しかし、聞くところによると、大手の製薬会社でもがん転移を標的にした創薬を模索しているようであり、近い将来、アカデミアで開発されているものも含め、多くのがん転移阻害剤が臨床試験へと入っていくようになるのではと期待しています。

「転移を制するものはがんを制する」と古くから言われているように、日本の国民病であるがんを制するためには、がん転移阻害剤の開発が不可欠です。様々なアプローチによるがん転移阻害剤の開発により、現在脚光を浴びているキナーゼ阻害薬と同じような画期的ながん転移阻害剤が創製されるものと思っています。私自身もその一翼を担えるよう、さらにAggrus阻害剤の開発スピードを上げていきたいと思っています。

第17回日本がん転移学会研究奨励賞募集

<http://jamr.umin.ac.jp/JAMRSite/encourage.html>

本賞はすぐれた研究業績を発表した本学会会員若干名に対して、
選考の上、本学会総会において授与します。

【募集期間】

平成24年4月1日～平成24年9月30日

- ・受賞候補業績の範囲は、原則として本学会において発表された業績として、本学会会員により応募されたものとする。
- ・受賞候補者は、将来の発展が期待される若手研究者（応募年度の4月1日現在40歳を越えないこと）で過去に本学会で発表した実績がある者とする。
- ・研究奨励賞受賞者数は単年度2名程度を原則とする。
- ・研究奨励賞の賞金（奨励研究費）は1件20万円とする。

募集要項・申請書等については、下記事務局までメール・Faxでお問い合わせ下さい

■事務局■ E-mail: office-jamr@umin.ac.jp Tel / Fax 06-6971-7951

研究奨励賞受賞者一覧

	受賞者	所属
第1回	藤田 直也 磯合 敦	東京大学分子細胞生物学研究所 旭硝子株式会社中央研究所
第2回	吉村 雅史 矢野 聖二	大阪大学医学部第二内科 徳島大学医学部第三内科
第3回	伊藤 和幸	大阪府立成人病センター研究所
第4回	越川 直彦	スクリプス研究所/横浜市立大学
第5回	吉治 仁志 軒原 浩	奈良県立医科大学第三内科 国立がんセンター中央病院内科
第6回	山本 博幸 伊藤 彰彦	札幌医科大学医学部内科学第一講座 大阪大学大学院医学系研究科病理病態学
第7回	李 千萬 板野 直樹	大阪大学大学院医学系研究科臓器制御外科 愛知医科大学分子医科学研究所
第8回	三森 功士 隈元 謙介	九州大学生体防衛医学研究所腫瘍外科 福島県立医科大学第二外科
第9回	滝野 隆久 粕 雄一朗	金沢大学がん研究所細胞機能統括 神戸大学大学院医学系研究科生体情報医学講座
第10回	菅原 一樹 川田 学	大阪大学大学院医学系研究科 (財)微生物化学研究会微生物化学研究センター
第11回	加藤 幸成	産業技術総合研究所 糖鎖医工学研究センター
第12回	下田 将之 小泉 桂一	慶應義塾大学医学部病理学教室 富山大学和漢医薬学総合研究所病態生化学
第13回	渡邊 リラ	第一三共株式会社
第14回	王 偉 山本 真義	金沢大学がん研究所腫瘍内科 浜松医科大学第2外科
第15回	清水 史郎	慶応義塾大学 理工学部
第16回	早川 芳弘 福島 剛	東京大学大学院研究科 宮崎大学医学部 病理学講座腫瘍・再生病態学分野